

# 平成15年度学力向上フロンティア事業中間報告

都道府県名 山梨県

## 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	田富町立田富小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	2	20	27
児童数	84	91	95	90	89	93	5	547	

## 研究の概要

### 1. 研究主題

『確かな学力』を育てる学習指導の創造に関する研究 「生きる力」につながる授業づくりを通して ----- 2002 「確かな学力」を育てる指導と評価の一体化を通して ----- 2003・4
------------------------------------------------------------------------------------------------------

### 2. 研究内容と方法

#### (1) 実践学年・教科

<p>・全学年</p> <p>・算数 国語 総合的な学習の時間</p> <p>学校での学習の責任は誰が取るのか。「先生は、どの児童にも、同じ指導内容を同じ指導方法で平等に教えた。だから学習の最終責任は子どもにある。」という、なかなか払拭できない従来の形式的平等主義を、児童個々の個性的な学び方に応じて学習指導方法を変えなければいけない実質的平等主義へと変換し、指導者たる教師が、学習指導を創造していけるようにならなければ、「確かな学力」を育てることは出来ない。</p> <p>各教科領域の特殊性を考えたとき、1教科あるいは1領域での研究でそのような学習指導力を、一教師がたった一人で、研究教科領域一つを核として研究し、指導力を身につけていけるのか。否である。「確かな学力」もまた、個性ある児童の中に、一教科領域で育てられていくものではない。全教科領域に於いて、学ぶことが更に新しい学びの動機づけを生み出すことを可能にする学びを、学校が提供することによって、児童の中でそれらの学びがコラボレートしつつ、「確かな学力」として育てられていくのである。</p> <p>学習の責任を、教師が児童や保護者や地域等にどう取っていくかを考えたとき、本来、全教科領域で行うべきであるところを、研究の深まりを考えて絞り、以下の理由で2教科1領域を選択した。</p> <p>教育の問題は常に不易と流行を考えていかなければならない。国語も算数も不易の、そして総合的な学習の時間は流行の、柱である。</p> <p>1. 国語は、自己表現と他者理解につながる教科であり、人間として生きていく根幹にかかわるものだからである。算数は、人類が人間として、これまでもこれからもよりよく生き抜いていくための、知恵に結びついていく教科であるからである。</p> <p>2. 公教育の始まる前から、日本では読み書きそろばんと言われるように、国語、算</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

数が教育の基本問題であると考えられてきた。

3. 常に教育の問題は学力にかかわって考える必要がある。この2つが学力について考える入り口の教科である。
4. 保護者の学校に寄せる期待の中で、教科にかかわって挙がってくるものが国語と算数に関するものが多い。この2教科で結果を出していくことが、保護者の、学校に寄せる信頼を大きく得ることにつながる。
5. この2教科が、特に個人差が現れる教科であるから、入門期の問題として力を入れておく必要がある。

## (2) 年次ごとの計画

平成 十四 年度	<p>テーマ 「『確かな学力』を育てる授業の創造」に関する研究 - 「生きる力」につながる授業づくりを通して -</p> <p>仮説 教科（国語・算数）及び「総合的な学習の時間」において、学習過程に、個に応じた指導と、指導と評価の一体化を図ることによって、確かな学力を身につけた子どもが育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 <b>3年間を通して</b> 研究内容</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 算数科，国語科及び「総合的な学習の時間」における，個に応じた指導方法・指導体制の在り方<ul style="list-style-type: none"><li>・課題別（習熟度別）学習の効果</li><li>・TT指導の効果</li><li>・基礎基本の学習の定着と発展的学習を展開する指導支援の工夫</li></ul></li><li>2. 指導と評価とを一体化させた授業の創造<ul style="list-style-type: none"><li>・指導に生きる評価規準と（評価項目及び）評価基準の作成</li><li>・評価の場の設定</li><li>・評価方法の開発</li></ul></li></ol> <p>研究方法</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 仮説については，教科（算数科・国語科）と「総合的な学習の時間で，部会ごとと具体仮説を立てて検証授業を中心に検証する。（毎年）</li><li>2. 一人一実践を公開し互いに学び合い高めあう場とする。</li></ol> <p><b>平成14年度</b> 「田富小学校の学力向上フロンティアとは」</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「確かな学力」についての学習（個々）</li><li>・「確かな学力」についての学習と共通理解</li><li>・検証授業（部会ごと代表者による授業及び一人一実践）</li><li>・田富小学校の学力向上フロンティア事業のアウトライン作成</li></ul>
----------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

平成十五年年度

テーマ

「『確かな学力』を育てる学習指導の創造」に関する研究

- 「確かな学力」を育てる学習指導と評価の一体化を通して -

仮説

教科（国語・算数・生活科）及び「総合的な学習の時間」において，学習過程に，個に応じた指導と，指導と評価の一体化を図ることによって，確かな学力を身につけた子どもが育つであろう。

研究内容・方法

研究内容

1. 学習指導と評価とを一体化させた授業（学習指導評価を生かした学習指導評価の改善）の創造をメインに行う
  - ・評価・評定についての理論研究すなわち，絶対評価及び絶対評価と相対評価との兼ね合いについての共通理解を図る。
  - ・評価の場の設定研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・when where
  - ・（具体的評価規準の作成等による）評価の内容の研究・・・・・・・・what
  - ・（指導面のみならず，学習者自身の学習面でのポートフォリオ・学習感想といった）評価方法の研究・・・・・・・・・・・・・・・・how
2. 算数科，国語科及び「総合的な学習の時間」における，個に応じた指導方法及び指導体制の在り方
  - ・課題別（習熟度別）学習の効果
  - ・T・T指導の効果
  - ・一部教科担任制の効果
  - ・基礎基本の学習の定着と発展的学習を展開する指導支援の工夫
  - ・（保護者や地域人材の活用をさぐる）

テーマ・副題・仮説の中の「授業」という言葉は「学習指導」に変更した。授業という言葉は，教師中心の昭和30年～50年の教師中心の思潮を引きずったままの姿勢からの未脱皮を示しており，学びの実態に寄り添うニュアンスに遠い。今日的教育課題・思潮からかけ離れている「授業」という言葉を，「学習指導」という言葉に代えることで，学習の主体者はあくまでも児童である，と同時に，教師は確かな指導を行うべきである，という認識を明確化した。

指導方法の先行は，概して目的意識を希薄にし，テーマ達成から研究を遠ざけてしまいがちである。2002年度の研究を経て，学習指導と評価の一体化無くして「確かな学力」を育てることにはなり得ないという確かな手応えを得たため，初年度からの計画通り本年度の副題を変更し，本年度の強化研究内容を上記1とし，上記2の個に応じた指導方法・指導体制の在り方については，2003年度以降は上記1をベースとして検証授業の中に盛り込み，各自学習指導者が具体的に提起しながら研究を深めていく事となった。

研究方法

1. 仮説については，教科（算数科・国語科）と「総合的な学習の時間」で，部会

- ごと具体仮説を立てて検証授業を中心に検証する。(毎年)
2. 一人一実践を公開し、互いに学び合い高めあう場とする。

#### 具体的研究内容及び方法

- ・ 個に応じた学習指導方法(検証授業の中に必ず提案を盛り込む。4月に単元とともにT・T指導,習熟度別・コース別学習,地域人材等の活用,少人数指導等の中から数項目チョイスして指導案検討会と授業後研究会で学習研究していく。)
- ・ 指導と評価の一体化評価(校内研究会の中に理論研究学習会を入れていく。)

例えば算数においては,

単元を通して,4観点に渡ってバランスよく評価を行う。

「確かな学力」とは,4観点の学力がスパイラルに相関し合って身につけていくものであるという,本校の学力観に沿って,4観点に沿って単元の達成目標たる評価規準を設定した。よって,わり算の筆算のしかた理解といった「知識・理解」や,計算練習といった「技能・表現」のみに力を入れるのではなく,計算のしかたを説明したり,計算の仕組みを自分で考えるような,「関心・意欲・態度」「思考・判断」といった学力を育成する授業の展開を図っている。

評価規準及び具体的評価規準を作成し,評価をどこで行うかを明確にする。(what・where)

評価規準や具体的評価規準の作成は,授業の目標を明確に設定し,各時間の指導の重点を定めて授業を展開するのが目的である。それが,「確かな学力の確かな習得につながるからである。まず本単元のレベルでしっかり作成し,一単位時間においては,その授業の教材や学習活動の実際に応じて,評価の観点を重点化するようにした(具体的評価規準の作成)。同時に評価を行う場所も明確にし,目標が落ちなく達成されるようにした。

T・Tによる即効かつ的確な見取り(評価)による即効かつ柔軟な支援(指導)を行う。(who・when)

複数の教師が共同して,T・Tを行い,少人数学習にしたり,習熟度別学習指導にしたりして,きめ細かい評価,指導ができるようにする。

座席評価表の作成と利用による,評価の迅速さとCへの支援による基礎基本の徹底を図る。(how)

Cレベルの児童を見てCと評定するのが目的ではない。本校のCが指し示すものが,「達成されていない」という文言ではなく,「努力を要する児童への支援」という設定のしかたがされていることから理解できると思う。目標をまだ達成していない児童がもしいた場合,その児童にどう再指導して,Bレベルに引き上げるか,それぞれの手だて(支援)を具体的に記述しておき評価が基礎基本の徹底の指導へと即還元され,授業改善に結びつくようにした。(本年度は特に,基礎・基本の徹底に重点を置き,BレベルをAレベルにというのは欲張らない。)

- ・ T・Tを算数で行い，これまで通り6・5・4学年所属で低学年のそれぞれ1・2・3の学年をペアー学年としてT・T担当の3人が分担して担当し，T・T指導計画をもととして行う。T・Tを行う単元は，昨年作成した優先順位で行う。）
- ・ どの学年も合算(TT担当が入る可能性あり)を1時間入れておく。
- ・ 教科担任制を国語を抜かした教科で行っていく。(T・Tとの兼ね合い)
- ・ 朝活を表現・処理という学力の定着に利用していく。算数は計算領域を中心に行い，国語は漢字を中心に行う。曜日と時間は，教師がチェック支援を行えるように，下記のように時間を設定した。

	月	火	水	木	金
8:30~8:50	読	漢	音	算	算
8:50~9:00	朝の会				

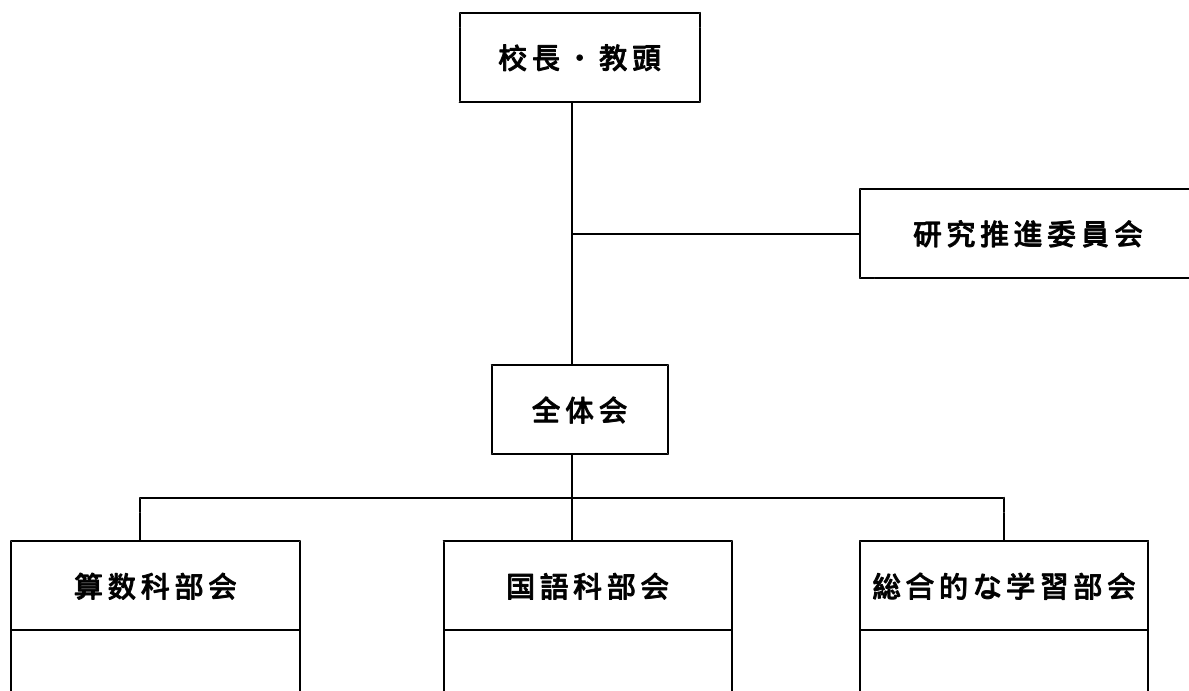
そしてその延長として，計算オリンピック大会・漢字オリンピック大会（仮名）を，希望児童対象に学期毎実施し，意欲を喚起するように計画した。

- ・ 中間発表会を行い，成果の普及の責務を果たすと共に，研究の成果と課題を明らかにしていく。
- ・ 先進校視察を部会ごと実施し，研究を深める。
- ・ 外部講師を全体と部会にそれぞれ招いて，理論や実践へのご示唆をいただく。

平成十六年度	<p>テーマ 平成15年度に同じ 仮説 平成15年度に同じ 研究内容・方法 「田富小学校の学力向上フロンティア事業公開実施研究会の計画と実施」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実施計画に基づく公開授業</li> <li>・ 研究集録の作成</li> <li>・ 研究実施報告書の作成と提出</li> </ul>
--------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### (3) 研究推進体制

- ・ 3部会（本年度は副部会長も置く）
- ・ 学年一名ずつは3部会に分かれて（縦系列の系統性を明確にしていく）！！
- ・ 推進委員（校長・教頭・教務主任・部会長・コンピュータ主任・十年研授業者・研究主任）
- ・ 専門部の組織を縦系に，学年部の組織を横系に，その交点に職員1人ひとりが位置付きそれぞれが専門員として責任を持って当たる。



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

### 1. 研究の成果

検証授業や一人一実践授業（学習指導作り）に襟を正して取り組むことで、「確かな学力」とは何か、なぜ「確かな学力」を育てるべきか、育てるためには、個に応じた指導と指導と評価の一体化が必要にして不可欠である、という方向性が再確認されたこと。

成果であると共に、今後、研究を押し進める為の足がかりとなる教育課程を、「確かな学力」評価目標として位置づけ、作成できたこと。

指導と評価の一体化を行うための具体的道具である、評価規準と具体的評価規準（評価基準とも呼ばれている）、及びそれを受けて、実際に学習指導の中で児童の実態を見取り、評価し、支援指導するために、具体的評価規準を更に具体化したもの（本校では具具体的評価規準と名付けている）の一部作成やマトリックス作りに着手できたこと。

個に応じた指導を行うための具体的手段として、T・T指導や座席評価表、1時限内モジュールといった具体的方法の研究に着手できたこと。

全学級が足並みそろえてというわけにはまだいかないが、これら指導側の成果によって、学習者たる児童が明確にされた1時間1時間の「確かな学力」を身につけてきたこと。そのことによって、学びの受け手であったこれまでの授業から学習指導への転換を楽しみ、自分で課題を見つけ学ぶ意欲を喚起させ、思考すること判断すること表現することを楽しむようになり、そのような学習指導を、児童自ら欲するようになってきたこと。

### 2. 今後の課題

上記の成果は同時に、来年度更に研究を具体化し押し進めていくための課題でもある。よって、組織の縦系の強化はもちろん、横系の強化を図る意識の強化と時間の確保が課

題である。

評価目標を達成する，学習指導（豊かな学習内容，指導方法，指導体制）のより一層の充実。

基礎・基本の確実な定着を図るための，個々の教材研究。

指定研究を進めて行くにあたりまず大事な伏線となるのが，先生方の意識である。先生方一人ひとりが自主的な研究意識をもって主体的に研究を欲し，継続し，意識を高揚させていけるかということである。そこには人頼みや責任転嫁があってはならない。研究に向き合えば向き合う程，これもしなければならぬ，あれも視野に入れなければならぬ，それも出来ないと，深淵に飲み込まれそうになり，藁にもすがらうようなつもりで，目の前の何か確かだと思える内容なり方法なりに流れようとしがちだが，それは目的から遠のくこと，悪くすれば方向を見誤ることにつながりかねない。踏みこたえて，フロンティア精神をもって果敢に研究を押し進めていくしかないのである。この，先生方の総意をまとめていくことがまず容易ではない。何かの方法研究を請け負っているわけではないので，スタッフが変わると，研究の目的・内容・方法等の共通理解に一進一退で，なかなか具体的方策を深める方向に研究が進まず，焦燥の感が否めない。

#### 学力等把握のための学校としての取り組み

\* 学力調査の実施（例年，学年末に年1回国語と算数で実施）

\* 算数では学習感想書き，総合的な学習の時間ではポートフォリオ等で，主に「関心・意欲・態度」，「思考・判断」の学力を把握している。

#### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

\* 学力向上フロンティア事業中間発表会

・平成15年10月31日（金）

・田富町立田富小学校

・峡中教育事務所管内の公立小中学校教職員，山梨県下学力向上フロンティア事業対象校の教職員，公官庁教育関係各位

・フロンティアスクールにおける実践研究の成果を普及するという責務を果たすことは元より，本校職員の指導力向上へのさらなる啓発を，そしてまた，ご参会頂く方々よりご指導・ご助言をいただき，これからの教育実践を一層充実させるため。

\* 児島邦宏先生講演会

・平成15年6月6日（金）

・田富町立総合会館大ホール

・峡中教育事務所管内の公立小中学校教職員，山梨県下学力向上フロンティア事業対象校の教職員，公官庁教育関係各位

・昨年に引き続きのご講演をして頂くことで，本校教職員の研究理念の統一を図ると共に，教育改革のめざすところを誤り無く広く啓発して頂き，学力向上へ向けての不安や迷いを少しでも一掃して頂くため。

## 14 . 平成14年度の成果及び平成15年度の課題

### 成果

第一に教師が新学力観を受容するのに時間を要したが、「学力」については、知識の量の多少によってとらえるのではなく、指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身につけることはもとより、それにとどまることなく、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力が育まれているかどうかによってとらえるという学力観で共通理解がはかられた。それにより、新学力観を具現化するための授業へと、授業の指導目標や内容、方法などが変容しつつある。なお、定期的な学力調査の実施（例年、年1回国語と算数で実施）が3学期のため、「知識・理解」という学力調査及び変容調査はこれからである。「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、及び「技能・判断」という学力についてのより客観的なデータを得るための学力調査は、調査項目を検討中で、本年度は行っていないが、学習感想書きの実施や、子どもの座席表（資参）に集約された教師の支援に対する子どもの変化の様子（資参）からも、これらの学力が育っている様子を読みとることができる。何よりも、数値化された「知識・理解」のみを学力ととらえていた子ども自身の学力観が打ち砕かれ、自分を発見し変容させてくれる「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、及び「技能・判断」という学力の大切さに気づいてきたことが、大きな成果の一つである。

### 課題

基礎・基本の確実な習得や、学習目的を達成するための学習に対する意欲や興味・関心を引き出し、それを持続するような学習指導方法の工夫及び研究を行っていく。具体的には、個に応じたきめ細やかな指導の一層の充実をはかるためのT・T指導などの指導体制や、課題別・習熟度別学習などの指導方法の効果について検証していく。

次年度の副題にもある通り、指導と評価の一体化を通して、「知識・理解」、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、及び「技能・判断」という学力が、スパイラルに相関し合って「確かな学力」を育てていくための、評価研究を行っていく。

「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、及び「技能・表現」という学力についての実態及び変容データを得るための学力調査を行う。保護者や地域住民に対して趣旨を伝える活動や、人材バンクの活用などを通して、幅広く参加を呼びかけていく。



次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)  
行っている場合を■，行っていない場合を□とした。

【新規校・継続校】            □ 15年度からの新規校            ■ 14年度からの継続校

【学校規模】                    □ 6学級以下                    □ 7～12学級  
                                 □ 13～18学級                    ■ 19～24学級  
                                 □ 25学級以上

【指導体制】                    □ 少人数指導                    ■ T・Tによる指導  
                                 ■ 一部教科担任制                ■ その他

【研究教科】                    ■ 国語                    □ 社会                    ■ 算数                    □ 理科  
                                 ■ 生活                    □ 音楽                    □ 図画工作                □ 家庭  
                                 □ 体育                    ■ その他の領域(総合的な学習の時間)

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】            ■ 有                    □ 無